

原本蒙古字韻の復元

—校正字様の各本重入漢字をめぐる(2)—

吉池孝一

1. はじめに

校正字様“各本重入漢字”の第二項目に関わる「原本蒙古字韻」の部分を復元すると以下のようなになる。

ce [入] 截 截 (下二十八 a の c'e と se の間)

cè . . . . . [入] 截 截 . . . . . (下三十 b 以降の欠落部)

朱宗文は、このような“截 截”の重複のうち、前者の“ce [入] 截 截”を削除した。この校訂は、韻母がパスパ文字の e と è である入声の音節にあつては、下に示した①②の傾向があると朱氏が認識していたことを示すようにおもう。これによって旧濁音声母の截 截は e と結びつかないと判断し、“ce 截 截”のほうを削除したのであろう。以下に、このことについて述べる。なお、パスパ文字は脚注の方式によってローマ字に翻字する<sup>1</sup>。

①牙音(g k' k η)において4等は e と、3等は è と結びつく。

②牙音以外の破裂音・破擦音において旧清音声母は e と、旧濁音声母は è と結びつく。

2. 各本重入漢字

元代においては、蒙古字韻には幾つか異なる版があつたらしく、当時朱宗文はそれらを付き合わせて誤りと見なしたものを正し一本を成した。この一本を「朱宗文本」と称する。現存する唯一の蒙古字韻のテキストである『倫敦抄本』(ロンドンの大英図書館所蔵蒙古字韻)はこの「朱宗文本」の流れを汲むものである。

さて、朱宗文はその訂正の内容により、自らの作業を4種の項目に分類し、巻首に校正字様と題して収めた。先ず、各本を通じた誤りの訂正(各本通誤字)、次いで各本に重複し誤って収められた字の削除(各本重入漢字)、更に「湖北本」と称された一本の誤りの訂正(湖北本誤)、「浙東本」と称された一本の誤りの訂正(浙東本誤)とある。これらのうち、各本通誤字は『KOTONOHA』70 で検討した。次の各本重入漢字では二つの項目が扱われているのであるが一つ目については『KOTONOHA』85 で検討した。今回は、二つ目の項目の検討をとおして「原本蒙古字韻」の姿を復元し、次いで、それにどのような校訂を加えたかその過程を垣間見ようとおもう。

<sup>1</sup> <子音> 𐩨 g 𐩪 k' 𐩬 k 𐩮 ḡ 𐩰 d 𐩲 t' 𐩴 t 𐩶 n 𐩸 l 𐩺 b 𐩼 p' 𐩾 p 𐩿 m 𐻀 f (𐻁 f1 奉母 𐻂 f2 非敷母。f1,f2 の区別がない場合は f とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様) 𐩻 v 𐩽 j 𐩿 č' 𐻀 č 𐻁 ñ 𐻂 š (𐻃 š1 禪母 𐻄 š2 審母) 𐩻 ž 𐩽 j 𐩿 c' 𐻀 c 𐩻 s 𐩽 z 𐩿 h (𐻁 h1 匣母 𐻂 h2 曉母) 𐩻 γ 𐩽 y (𐻁 y1 喻母 𐻂 y2 幺(影)母) 𐩻 r 𐩽 q (半母音) 𐩻 ü 𐩽 i (母音) 𐩻 u 𐩽 i 𐩻 é 𐩽 e 𐩻 o とし、母音 a は()を付して補写する。

『倫敦抄本』の上三 a-b には校正字様と題された一葉があり本文の校訂について説明がなされている。その校訂の第二項目として各本重入漢字というものがある。下に示した I は『倫敦抄本』の各本重入漢字を翻字したものであるが誤写が極めて多い。II はその誤を訂正したものである。

I 各本重入漢字

【欠落】	誤以下二字重入此字内	č'ũ(a)v	連遄踔妮齷擗籜
c'e	誤以下十字重入此【欠落】	cè	截截

II 各本重入漢字

【欠落】	誤以下七字重入此字内	č'ũ(a)v	連遄踔妮齷擗籜
c'e	誤以下二字重入此字内	cè	截截

さらに内容の検討をとおしてパスパ文字の誤写を訂正して示すと III のようになる。

III 各本重入漢字

č'(a)v	誤以下七字重入此字内	č'ũ(a)v	連遄踔妮齷擗籜
ce	誤以下二字重入此字内	cè	截截

III は小稿の結論の一部であり、これは「原本蒙古字韻」の復元とセットになっている。すなわち、各本重入漢字は各本に重複して収められている字の一方を削除することについてのべたものである。各本が共有する特徴は、それらが拠った書の特徴の反映であるから、各本が拠った「原本蒙古字韻」にも、各本と同様な重複があったと考えなければならない。したがって、各本重入漢字の検討は、現存する『倫敦抄本』にない部分の復元、すなわち「原本蒙古字韻」の復元につながるのである。今回は先に述べたように二つ目の截截について検討する。

3. 二つ目の項目の校訂

さて先の II によると各本重入漢字の二つ目の項目は、“c'e 截截”と“cè 截截”のうち、前者を削除したという朱宗文の校訂について述べたものということになる。

そこで校訂の対象となるパスパ文字の c'e と cè に対応する本文部分を抜き出し、『新刊韻略』によって所属韻と反切と字の順番を記すと次のとおりである。なお○を付した数字は小韻に所属する文字のうち最終字であることを示す。したがって①は小韻代表字のみということになる。

①	1	③	2	1	②	
ア c'e [上]	且	[入]	切	竊	臚	妾 緹
	21 馬/七也切		9 屑/千結切		16 葉/七接切	(下二十八 a の 2 行目)

イ 【cè この部分は『倫敦抄本』で欠落】 (下三十 b 以降の欠落部)

アに“c'e 截截”はない。一見すると校正字様のとおりに校訂された結果、アの c'e から



てどのように校訂したか以下において確認する。そこで、截（截の別体）が収録されている『古今韻會舉要』の入声の“九屑與薛同用韻”に収められた全ての小韻代表字を挙げると次のようである。

- ・ 結(角清音)、掣(角次清音)、窒(徵清音)、鐵(徵次清音)、涅(徵次濁音)、驚(宮清音)、擊(宮次清音)、蔑(宮次濁音)、節(商清音)、切(商次清音)、屑(商次清次音)、浙(次商清音)、掣(次商次清音)、設(次商次清次音)、噎(羽次清次音)、纈(羽濁音)、齧(羽次濁音)、列(半徵商音)、熱(半商徵音)・・・・・・・・・**巴上屬結字母韻**
- ・ 揭(音與月韻訃同)、揭(音義與月韻揭同)、傑(音與竭同)、孽(音與鐵同)、姪(徵濁音)、蹙(宮濁音)、截(商濁音。説文本作截・・・・・・・・・**蒙古韻截屬結字母韻**)、轍(次商濁音)、舌(音與徹同)、拙(羽次濁音)・・・・・・・・・**巴上屬訃字母韻**
- ・ 玦(角清音)、缺(角次清音)、蕪(商清音)、雪(商次清次音)、絶(商濁音)、拙(次商清音)、綴(音與拙同)、歎(次商次清音)、説(次商次清次音)、抉(羽清音)、血(羽次清音)、穴(羽濁音)、悅(羽次濁音)、劣(半徵商音)、{蕪+火}(半商徵音)・・・・・・・・・**巴上屬玦字母韻**

上に示したように『古今韻會舉要』では入声の第九屑與薛同用韻の内部は、結字母韻、訃字母韻、玦字母韻という三種の韻母のグループに分かれる。ここで言う“字母韻”とは『古今韻會舉要』特有の韻母のグループ分けである。これらの字母韻に属する諸字が、『倫敦抄本』および他のパスパ字漢語資料に於いて、どのようなパスパ文字で表記されているかということを見ると次の通りである。なお、訃字母韻に相当する諸字が配列されていたはずの部分は『倫敦抄本』では欠落している。しかしながら、この字母韻に対応するパスパ文字が é であることは、校正字様の“cé 截截”およびパスパ字碑文やパスパ字百家姓中に散見される訃字母韻字によりわかる<sup>2</sup>。

- ・ 結字母韻・・・・・・・・パスパ文字の e
- ・ 訃字母韻・・・・・・・・パスパ文字の é
- ・ 玦字母韻・・・・・・・・パスパ文字の ũe

このように、結字母韻の諸字はパスパ文字の e に対応し、訃字母韻の諸字はパスパ文字の é に対応し、玦字母韻の諸字はパスパ文字の ũe に対応する。ところで、先に挙げた『古今韻會舉要』をみると、問題となる小韻代表字の截(截。所属字は齧のみ)は訃字母韻 é の一員であるが、その注記に“蒙古韻では結字母韻に属す”とある。そうであるならば、截(截の別体)は、『古今韻會舉要』では訃字母韻 é で、「蒙古韻」では結字母韻 e であったということになる。

<sup>2</sup> 照那斯圖・楊耐思 1987 において欠落部分の復元が試みられている。

ここで、截（截の別体）が関係諸本においてどのように扱われているかということにつき『古今韻會舉要』の字母韻を用いて並べ示すと次のようになる。なお、この表で「蒙古韻」すなわち逸書「蒙古韻略」に【 】を付したことにつき一言しておかなければならない。「蒙古韻」が結字母韻 e であったことは『古今韻會舉要』の注記より明らかであり、“蒙古韻では結字母韻に属す”とある。この注記の表現よりみて「蒙古韻」に登録されていたのは結字母韻 e のみであろうと想像するのであるが、訃字母韻 é が無かったとも言い切れないため、【 】を付して併記した次第である。

#### 截（截の別体）

『古今韻會舉要』	訃字母韻 é
「蒙古韻」	結字母韻 e 【と 訃字母韻 é】？
<hr/>	
「原本蒙古字韻」	結字母韻 e と 訃字母韻 é
『倫敦抄本』	校訂による削除 結字母韻 e と 訃字母韻 é

「原本蒙古字韻」には結字母韻 e と訃字母韻 é の両者が重複して併記されていたのであるが、朱宗文は『古今韻會舉要』に訃字母韻 é のあることをみてこれを採用し、「蒙古韻」すなわち逸書「蒙古韻略」の結字母韻 e の方を削除したのである。

#### 6. 校訂の理由

次に、朱宗文はなぜ結字母韻 e を削除したのかということにつき検討する。この点に関連したものとして、照那斯圖・楊耐思 1987 に次のようにある。原文に対してやや私の言葉を加えて示すと次のようになる。

『古今韻會舉要』の“截”には“蒙古韻截属結字母韻”との注記がある。“截”は『廣韻』屑韻の所属字で、反切は昨結切であるから、旧濁音の従母字ということになる。

ところでパスパ字漢語の対音の方式によると結字母韻の e (吉池:原文は é である。本稿の翻字法によって改めた。以下同様)は旧濁音声母とは結合しない。したがって、「蒙古韻」は誤っているのであり、訃字母韻に帰すべきことがわかる。「朱宗文本」が結字母韻 e に“截”を集録しないのは、すでに『古今韻會舉要』によって校訂しているためである<sup>3</sup>。

これは、蒙古字韻の欠落部に補した“截”について論じたもので、直接校正字様に言及したものではないが、“パスパ字漢語の対音の方式によると結字母韻の e は旧濁音声母とは結合しない”とする点は興味深い。考えようによっては、このような対音の傾向を、朱宗文も考慮したということになろう。そこで、このことについて、いま少し検討したい。

<sup>3</sup> 「“截”，《韻會》：“《蒙古韻》截属結字母韻”。按“截”，《廣韻》屑韻“昨結切”，従母字。按八思巴字對音体例，結類 é 跟“濁”声母不相拼合，可証《蒙古韻》爲誤，歸“訃”類。朱本“結”類 é 不取“截”，蓋已按《韻會》校正。」(147 頁)。

旧清音声母+結字母韻(ㄍ e)

旧濁音声母+訃字母韻(ㄎ è)

声母の有声無声の相違と e, è との対応については、早くは Dragunov1932 で言及された。すなわち、声母が有声か無声かということに伴って発生する音調の高低と関係するというのである。有声音（低調）の後で è となり、無声音（高調）の後で e となるというものであるが、例外も多いとして自ら否定しつつ紹介した論である<sup>4</sup>。これはパスパ字漢語全体の傾向について述べたものであるが、蒙古字韻の当該箇所すなわち è と e を含む第十五麻韻の状況を調査する必要がある。そこで『倫敦抄本』を見ると、第十五麻韻のうち、è を含む後半部分は欠落しているが、幸いにして e の部分は完全に残っている。問題の è の部分については、寧忌浮 1997 によって『新刊韻略』を材料として復元がなされている。そこで、復元がなされた部分および残存部分に拠り è と e に別れた条件を確認すると次のようになる。なお、適当なフォントがない場合{石+皇}のように示す。所収字の後に付した“(九屑, 古屑切) 薛見 4”という注記の“(九屑, 古屑切)”は『新刊韻略』の、“薛見 4”は『五音集韻』の情報である<sup>5</sup>。

■以下は『倫敦抄本』にある部分。

ge 結拈絜\*潔潔拈(九屑, 古屑切) 薛見 4/頰缺筴挾莢挾(十六葉【拈】, 古協切) 葉見 4

k'e 挈契(九屑, 苦結切) 薛溪 4/愜挾篋(十六葉【拈】, 苦協切) 葉溪 4

de 窒閤(九屑, 丁結切) 薛端 4/喋跼(十六葉【拈】, 丁愜切) 葉端 4

t'e 鐵饗贓\*(九屑, 他結切) 薛透 4/拈帖鈷帖貼(十六葉【拈】, 他協切) 葉透 4

\*は『新刊韻略』の字形による

ne 涅篋{石+皇}茶\*(九屑, 奴結切) 薛泥 4/聶躡鑷(十六葉, 尼輒切) 葉娘 3/捻斂攝(十六葉【拈】, 奴協切) 葉泥 4

\*は『新刊韻略』の字形による

je 哲蜚(九屑【薛】, 陟列切) 薛知 3/輒(十六葉, 陟葉切) 葉知 3/徹撤澈(九屑【薛】, 直列切) 薛澄 3/哲浙折(九屑【薛】, 旨熱切) 薛照 3/讐懾{土+習}\*懾(十六葉, 之涉切) 葉照 3/輒(九屑【薛】, 直列切) 薛澄 3/摺(十六葉, 之涉切) 葉照 3

\*は『新刊韻略』に無し。摺の誤写か

č' 撤徹眈(九屑【薛】, 丑列切) 薛徹 3/掣(九屑【薛】, 昌列切) 薛穿 3

be 彌閉(九屑, 方結切) 薛幫 4/驚鼈(九屑【薛】, 并列切) 薛幫 4/別(九屑【薛】, 方別切) 薛幫 3

p' 瞥擊(九屑, 普蔑切) 薛滂 4

<sup>4</sup> “On the evidence of these examples one would be inclined to think that there were two –e’s of different kinds in AM., depending on the pitch of the tone. After sonants (low tone) we find –ie but after surds (high tone) –iè. This conclusion would, however, be somewhat rash, as the number of exceptions is rather large.” (p.777)。本文中の–ie はパスパ文字の è に相当し、–iè はパスパ文字の e に相当する。

<sup>5</sup> 中村 1994 中の“蒙古字韻・五音集韻対照表”参照。この文献は蒙古字韻の音特徴を確認する際には非常に有用である。

- me 蔑蟻箴嘍\* (九屑, 莫結切) 薛明 4 / 滅\*\* 滅 (九屑【薛】, 亡列切) 薛明 4  
 \*は蟻の誤写か \*\*は『新刊韻略』の字形による
- je 節{次+朶} (九屑, 子結切) 薛精 4 / 接睫接楫楫捷莛 (十六葉, 即葉切) 葉精 4 / 浹 (十六葉【估】, 子協切) 葉精 4
- c'e 切竊醜 (九屑, 千結切) 薛清 4 / 妾緘 (十六葉, 七接切) 葉清 4
- se 屑楔躄 (九屑, 先結切) 薛心 4 / 薛 (九屑【薛】, 私列切) 薛心 4 / 僊 (九屑, 先結切) 薛心 4 / 繼泄褻  
 嫖\* 离嫖 (九屑【薛】, 私列切) 薛心 4 / 燮屨{足+燮} (十六葉【估】, 蘇協切) 葉心 4  
 \*は溧の誤写か
- š2e 攝葉歛磔鞞 (十六葉, 書涉切) 葉審 3 / 諛\* (九屑【薛】, 識列切) 薛審 3  
 \*は設の誤写か
- h2e 脅脅{弓+合} 嚼嚼 (十六葉【業】, 虛業切) 乏曉 3
- h1e 纈擷頡隼 (九屑, 胡結切) 薛匣 4 / 協叶颯挾俠 (十六葉【估】, 胡頰切) 葉匣 4 / 紱 (十六葉【新添】, 胡頰切) 葉匣 4
- e 謁謁 (六月, 於歇切) 月影 3 / 膾裏浥 (十六葉【業】, 於業切) 乏影 3
- y2e 噎咽 (九屑, 烏結切) 薛影 4 / 厭 (十六葉, 於葉切) 葉影 4
- y1e 齧臬薛輓陞闌{執+禾} (九屑, 五結切) 薛疑 4 / 嶮 (九屑【新添】, 五結切) 薛疑 4
- le 列迺烈冽冽裂茆剛榭 (九屑【薛】, 良薛切) 薛來 3 / 獵蠶躐 (十六葉, 良涉切) 葉來 3
- že 熱 (九屑【薛】, 如列切) 薛日 3 / 譟囁 (十六葉, 而涉切) 葉日 3

■以下は『倫敦抄本』の欠落部分を復元したもの。『新刊韻略』所収の入声字のみを記した。全て『古今韻會舉要』の訃字母韻の字であるからこのような復元も不当ではないであろう。

- gè 訃羯揭 (六月, 居謁切) 月見 3 / 子 (九屑【薛】, 居列切) 薛見 3\* / 劫 (十六葉【業】, 居怯切) 乏見 3  
 \*子。『韻鏡』『七音略』4等、『切韻指掌圖』『經史正音切韻指南』3等
- k'è 謁謁 (九屑【薛】, 丘謁切) 薛溪 3 / 怯怯 (十六葉【業】, 去劫切) 乏溪 3
- kè 傑桀竭碣櫟渴 (九屑【薛】, 渠列切) 薛群 3 / 極笈 (十六葉, 其輒切) 葉群 3 / 跽 (十六葉【業】, 巨業切) 乏群 3
- ŋè 讞 (六月, 語訃切) 月疑 3 / 孽蘖讞蝓萋蘖 (九屑【薛】, 魚列切) 薛疑 3 / 擘暈蝓燁 (十六葉, 筠輒切) 葉喻 3 / 業鄴業慄 (十六葉【業】, 魚怯切) 乏疑 3
- tè 姪映埵臺迭跌經陔啞 (九屑, 徒結切) 薛定 4 / 牒喋蹀蹀蹀蹀蹀蹀{執+足} 籛喋蹀 (十六葉【估】, 徒協切) 葉定 4
- čè 舌撲 (九屑【薛】, 食列切) 薛床 3 / 牒 (十六葉, 直葉切) 葉澄 3
- pè 蹀 (九屑, 蒲結切) 薛並 4 / 別喇 (九屑【薛】, 皮列切) 薛並 3
- cè 截截 (九屑, 昨結切) 薛從 4 / 捷捷捷 (十六葉, 疾葉切) 葉從 4
- jè 入声字無し
- š1è 涉 (十六葉, 時攝切) 葉禪 3\*  
 \*『新刊韻略』には他に“折” (九屑【薛】, 常列切)がある。『五音集韻』『古今韻會舉要』未収

のためここに挙げない

h2é 歇蠟(六月,許竭切)月曉3

y1é 拙(九屑【薛】,羊列切)薛喻4/葉撲(十六葉,與涉切)葉喻4

上の資料に抛りパスパ文字の e と é に分かれる条件をまとめると次のようになる。

- ① ge k'e ----- 4等  
 gè k'é ké ηè ----- 3等
- ② de t'e je č' be p' je c'e š2e -----旧清音声母  
 té čé pé cé š1é -----旧濁音声母
- ③ h2é y1é -----その他

①によると牙音(g k' k η)の4等はe(結字母韻)、3等はé(訶字母韻)となる。このように、牙音においてeとéが等位によって分かれるわけであるが、これは服部1984で指摘されているところと同様である。②の中で、jeが旧濁音の澄母字を含むという例外はあるが<sup>6</sup>、牙音以外の破裂音・破擦音において旧清音声母はe、旧濁音声母はéと結びつくことは明らかである。このようなeとéの使い分けが音声に関わるものであるか或いは音声とは関わりのない何らかの事情によるものか大きな課題であるが。①②のような傾向が有るといふことについては比較的容易に見て取ることができよう<sup>7</sup>。

以上によるならば、朱宗文は②の傾向を認識しており、旧濁音声母の截截が結字母韻eと結びつかないと判断し、「原本蒙古字韻」および各本で“ce 截截”と“cé 截截”が重複して現れていたところ前者を削除した、とみて大過はないであろう。

## 7. おわりに

朱宗文は各本重入漢字の第一項目においては、『古今韻會舉要』本文の音に抛らず、その注記にある「蒙古韻」に抛って重複した一方を削除した。今回の第二項目においては逆に、

<sup>6</sup> 旧濁音の澄母字の問題は、濁音声母が清音化するという実際の音が反映したものか。

<sup>7</sup> なお、花登1997によると、旧濁音声母+訶字母韻、旧清音声母+結字母韻という状況は『古今韻會舉要』及びそれに付されて音節表“禮部韻略七音三十六母通攷”でも同様に見られるが問題の從母字の扱いはそれぞれ異なるという。結・訶字母韻につき“通攷”の特徴を述べた個所に「濁音の舌齒音のみが訶字母韻に入り、その他は結字母韻に入るという大きな傾向性が見られ、從母字を除いて、兩字母韻には對立のないことが看取される。この從母字について精査すると、結字母韻には「截・捷」があり、訶字母韻には「捷」のあることが分る。このような状況は『舉要』にも存在するが、そこでは、結字母韻に入るのが「捷」、訶字母韻に入るのが「截」（「截」・「截」字は同字の別體）と丁度逆になっている。」(203頁)とある。この從母字の状況はなかなか興味深い。蒙古字韻を加えて表示すると次のようになる。

	“通攷”	『舉要』	「原本蒙古字韻」	「朱宗文本」
結字母韻(e)	截・捷	捷	截	/
訶字母韻(é)	捷	截(截)	截・捷	截・捷



「蒙古韻」には拠らず、『古今韻會舉要』本文の音に拠って重複した一方を削除した。朱宗文はその自序において“古今韻會”（『古今韻會舉要』）によって校訂すると述べているわけであるが、やみくもに『古今韻會舉要』を重用したのではなく、最終的には自らの判断によったことは、この二つの項目の扱い方からだけでも分かる。

これは吉池 2009b で述べたことであるが、各本重入漢字の第一の項目における校訂は次のようであった。すなわち、覺韻の正齒音・舌上音二等字は合口化するのであるが、無声有気音の連踴蹕齶擗擗籀だけが例外的に合口化しない音として重複して収録されていたところ、「蒙古韻」に合口化した音のあることを認め、(a)v の方を削除し、ü(a)v を採用した。今回確認した第二の項目では、牙音以外の破裂音・破擦音において旧清音声母はパスパ文字 e と、旧濁音声母はパスパ文字 è と結びつくのであるが、旧濁音声母の“截截”だけが例外的に e と結びつく音として重複して収録されていたところ、『古今韻會舉要』本文の音が訃字母韻すなわちパスパ文字 è であることを認め、その音に従って e の方を削除し、è を採用した。

以上によるならば、朱宗文の校訂の態度として、例外的な音形を廃し整然とした体系的な表記を求めるといふ点のあることを見て取ることができる。

#### <参考文献(発行年順)>

Dragunov, A. 1932, The hP'ags-pa script and Aciént Mandarin, *Izvestija Akademii Nauk SSSR, Otdelenie Gumanitarnyx Nauk* (Classe des Humanités), No. 9, pp. 627-647; No. 11, pp. 775-797. 今は北京勤有堂書店 1941 年影印本による。pp. 777-778 参照。

服部四郎 1984. 「パクパ字(八思巴字)について 一特に e の字と è の字に関して一(二)」, 『月刊言語』 Vol. 13-No. 8, 116-121 頁。

照那斯圖・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』北京：民族出版社。

中村雅之主編 1994. 『パスパ字漢語資料集覧』パスパ字研究会(富山大学人文学部中国語学研究室内)刊。

花登正宏 1997. 『古今韻會舉要研究』東京：汲古書院。

寧忌浮 1997. 『古今韻會舉要及相關韻書』北京：中華書局。

吉池孝一 2008. 「蒙古字韻の校訂と増補について」, 『KOTONOHA』第 70 号, 7-16 頁。

吉池孝一 2009a. 「原本蒙古字韻考」, 『KOTONOHA』第 81 号, 10-17 頁

吉池孝一 2009b. 「原本蒙古字韻の復元 一校正字様の各本重入漢字をめぐって(1)」, 『KOTONOHA』第 85 号, 13-20 頁。

\* 『KOTONOHA』のバックナンバーは、サイト「古代文字資料館」<http://www.for.aichi-pu.ac.jp/museum/>でご覧になれます。